

日本エッセイスト・クラブ

2022 春

NO.73-III

会報



第69回 日本エッセイスト・クラブ賞 受賞

さだの辞書

さだまさし



ときに爆笑、
ときに涙の自伝的エッセイ集

「目が点になる」の『広辞苑 第五版』収録をご縁に、
家族・故郷・ご先祖様、友・仲間・恩人、歴史・
土地・希望、本・音楽・映画を25の三題噺で語る。
温かな人柄とユーモアとセンスと……。多才多才
の秘密も見てくる。

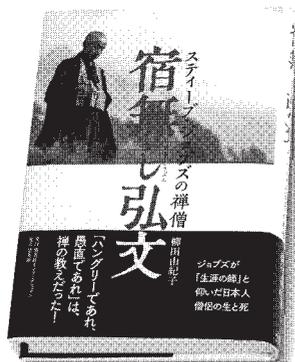
四六判・定価1650円

岩波書店



〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
<http://www.iwanami.co.jp/>

第69回 日本エッセイスト・クラブ賞受賞!



定価2,090円(税込)

『宿無し弘文』 スティーブ・ジョブズの禅僧

柳田由紀子 著



スティーブ・ジョブズが
生涯の師と仰いだ日本人僧——
その生涯を追い求める
骨太ノンフィクション!

集英社インターナショナル

〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町 1-5-18
<https://www.shueisha-int.co.jp/>

目次

日本エッセイスト・クラブ

會報

2022 春

題字 阿部 眞之助
表紙 よしだみどり
カット

「エッセー」

千年の作曲

オンライン授業顛末記

腕の見せどころ

尊厳ある買い物

最近、感じていること

終戦の年の夏

帝国ホテルの水

日本近海の海底火山噴火の思い出

エッセー募集

会員近況

事務局から

日本エッセイスト・クラブ定款

会員名

細川 俊夫 2

白井 和恵 5

上野 誠 8

三宮麻由子 12

高木 徹 16

今野 耕作 19

山本 一生 23

森本 貞子 26

30

31

34

36

38

千年の作曲

細川 俊夫

(会 員)

「二つの作品を作曲するのに、どのくらい時間がかかりますか」という質問をよく受ける。それに対して「室内楽曲だと二、三ヶ月、オーケストラ曲だと五、六ヶ月、オペラでしたら一年近くかかります」というような返事をこれまでしてきた。しかし最近は「どんな曲でもだいたい千年ぐらいかかっていると思います」と答えるようにしている。

私は、二十代に十年間ドイツに留学し、そこですでに習作としてさまざまな編成のために小曲を作曲した。最初は西洋音楽の音楽語法によって作曲し、そこに少しずつ自分の音感の要求に

沿った音楽要素を取り入れていった。ドイツ留学中にベルリンの音楽祭で、日本からやってきた雅楽、声明、能、尺八、箏音楽に出会い深く感動した。西洋音楽とは、あまりに異なったこれらの音楽に戸惑いながらも、自分の心の奥にはこのような音楽がまだ消えないで眠っているのだと思った。私の家族は、母は箏を弾き、祖父は生花の師匠をする極めて日本的な家庭であった。そのような和風な世界が嫌で、西洋音楽に惹かれて、音楽家を目指したのだ。しかし西洋音楽の素晴らしさに圧倒されつつも、自分が音楽表現をしようとすると、どうしてもその語

法では表現しきれないものを私は感じて、自分の独自の音楽語法を探していた。そして雅楽や声明、能の世界にこそ、自分の音楽の源泉があるのではと思ったのだ。

日本に西洋音楽が導入されたのは、まだ百五十年ぐらい前のことである。それ以前に日本には、千年以上の長い独自の音楽の歴史があった。そのことを多くの日本人は忘れて、西洋音楽の

細川 俊夫（ほそかわ・としお）



1955年広島生まれ。日本とヨーロッパを中心に作曲活動が続け、ベルリンフィル、ウィーンフィル、ザルツブルク音楽祭等から委嘱作品を受け、世界的に活躍している。主な作品にオペラ「松風」、「班女」、「大鴉」など。著書『魂のランドスケープ』で第46回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。

もつ強い力に圧倒され続けてきた。私たちの現在の音楽環境を見渡してみると、メディアや街に流れる音楽のほとんどが、西洋音楽の語法に基づく音楽によって溢れていることに気がつく。そして日本の伝統音楽は、一部の非常に小さなサークルの人々によって守られている。しかしその音楽はこの現代の錯綜とした世界を映すこともなく、博物館的に存在しているようだ。さらに日本の伝統音楽の演奏家たちは、現代と関わるために、ポップやロックの音楽要素を日本の楽器で演奏することによって、今の人に受けようとしている。しかしそうした試みは、日本の伝統音楽の持っていた本当の独自の深さと美しさを捨てて、安っぽいエキゾティシズムを生み出すだけだ。

私は長い期間ドイツで生活したが、そこで一番私が渴望したのは日本語と日本食だったように思う。私のドイツ語能力ではどうしても自分の心の底からの表現ができないもどかしさを感じる。そして日々の食事でもどうしても日本の味が恋しい。自分の音楽にもそれと同じように、西洋音楽の語法では、どうしても満足でき

ない微妙な表現の世界があるのだ。

二十世紀以降の西洋音楽の作曲家は、極めて理論的に音を構築していく作曲法で音楽を生み出している。しかし私自身はむしろ直感的に自分の無意識の世界に眠っている深い「声」を聴き出して、それに形を与えるような作曲をした。この無意識の世界には、私の意識しない未知の千年以上の音楽の歴史が横たわっているのではないか。私が心の底から表現したい音楽は、私がこれまで学んできた音楽世界を超えた宿業のような奥深い層から響いてくるのではないか。

暗きより暗き道にぞ入りぬべき
遙かに照らせ山の端の月

現在私は、和泉式部のこの歌をテキストに合唱曲を作曲しようとしている。ドイツのシュトゥットガルトの合唱団からの委嘱で、歌うのは日本人ではないが、日本語で歌ってもらおう。和泉式部は平安時代中期の人で、ちょうど千年ぐらい前に生きた人だ。「暗きより暗き道」とは、人間の煩惱の深さを意味するのだろうか。そして

そこに「月の光を私に照らせ」というのは、救いへの祈りをこめている。千年前のコトバ（言葉）が、私を突き動かし作曲に向かわせる。この小さな作品の誕生には、確かに千年の時が必要だったのだ。

私の関わっている現代音楽の世界では、「新しさ」が大きな意味を持ち、それが評価の大きな軸となる。しかし「新しさ」が人の頭で考えたコンセプトにとどまっている間は、音楽は薄っぺらな表現に終わってしまうだろう。音楽の深く新鮮な声を、自分自身も知らない深い歴史の源泉から汲み出し、千年以上の時をかけて生み出していききたいと、私は願っている。

オンライン授業顛末記

臼井 和恵

(会 員)

コロナ禍が二年余に及ぶこの三月、わたしには天職ともいえる教師の職を辞した。ズームを中心としたオンライン授業に、弓折れ矢尽きたとも言える。教室に大勢の学生が集まり、若者の熱気や匂いが充ちた教室での授業は、遂に戻らなかつた。学生の私語に怒ったことすらも懐かしいくらいだ。

勤務校は、三十年余教えた前任校を定年退職間近に、思いがけず舞い込んだ再就職先であった。教員免許を出している大学の教員資格を、近々文科省が再審査するという頃であり、多少の年功がある教員に声が掛かったというわけで

ある。勤務先は池袋で自宅からは二時間余かかるといふ難があつたが、声を掛けてもらえたことが、正直嬉しかった。また四月から学生に会えて授業が出来る！

新任校は共学であり、男子学生を教えられるという魅力も大きかつた。わたしの勤務先は女子大ばかりであつた。さらに出身大学が大塚の地にあり、池袋はわが青春とも繋がる街でもあつた。あの頃はまだ都電が走っていた。

週三日勤務、朝一限の時間割はなし、との我侭も聞いてもらい新生活は始まつた。男子学生は元気でやんちゃでわたしを驚かせた。が、実

にいいところもあり、新鮮だった。帰りの駅に向かうグリーン大通りでは、青江三奈の「池袋の夜」を口ずさんでいたりした。

優秀な学生もあり、小学校や特別支援学校の教員へと希望を叶えていった。「先生、教員採用試験合格しました」という学生のメールや「東京都受かりました!」という可愛いカードの何

白井 和恵（うすい・かずえ）



1949年群馬県生まれ。お茶の水女子大学大学院家政学研究所修士課程修了。相模女子大学教授、副学長を経て、相模女子大学名

誉教授。2022年3月東京福祉大学教育学部教授退職。著書に『生活文化の世界―人生の四季に寄せて』（酒井書店）、『窪田空穂の身の上相談』（角川書店）、『明治の恋―窪田空穂、亀井藤野の往復書簡』『最終の息する時まで―窪田空穂、食育と老い方モデル』（いずれも河出書房新社）ほか多数。

と嬉しかったことだろう。定年の区切りの三年間があつという間に過ぎようとしていた。

区切りが終わる前、二〇二〇年一月に大学側の面接があつた。七十歳定年なので、定年後の継続の有無と給与体系が変わることの確認であった。「給与の方は（減額は）かまいません」とわたしはかっこよく応え、継続を希望した。ここで退職しなければその後の苦労はなかったのだ。既に武漢では、コロナウイルスが発生し、拡大を始めていたのである。わたしは、中国の事だと限定的に思い、その後二年も続く今日の状況を予想だにできなかった。

コロナウイルスは中国限定どころか、日本でも増え続け、安倍首相は二〇二〇年四月七日に緊急事態宣言を発令した。まさに新学期が始まるその時である。ズームを用いたオンライン授業の導入が決定され、授業開始は五月十三日に延期、それまでに全教員がズーム授業の方法を習得しなければならぬ。急遽、大学の情報処理教室にて特訓が始まった。みんな一所懸命。ズーム授業は、授業クラスごとの学生に、授業の「招待メール」を送ることから始まる。こ

れが一番大事と言ってもよい。「五月十五日金曜日三時限の専門演習の授業に参加してください」これが手も震えんばかりに緊張して打ち込んだ、わたしの最初の招待メールである。

二〇二〇年五月十五日金曜日三時限、自宅からのズーム授業の開始である。パソコンのズームを開き、予約済みのこの授業の「開始」をクリックすると、何やら画面に映った。ゼミの学生たちの顔だ。涙が出るほど嬉しかった。

慣れてくると学生側の様子が分かってくる。出席を取る時は参加しているのだが、途中で指名すると、応えなかったりするのだ。しかし、ネット接続の不具合と区別することが出来ない。ビデオオンにして顔を見せてと頼んでも、オンにすればズームが落ちてしまうとかわれば、仕方がない。事実、携帯のスマホ画面だけで繋がっている経済的に苦しい学生もおり、胸が痛んだ。必須課題の模擬授業は、オンラインで何とかクリアしてもらわなくてはならないのだ。自宅の通信環境もよく、パソコンが自由に使える学生は、前もって作成したパワーポイントを駆使した見事な授業を展開し、教室での黒板

利用の授業とはまた違った良さを感じさせた。スマホのビデオ機能を用い、工夫を重ねて何とか授業を終え、わたしをホロリとさせた学生もいた。コロナが鎮まり気味の時は、「ハイブリッド」授業と称して、教室のパソコンに向かいズーム授業を行った。登校し、教室のパソコンを用いて授業をした学生も、友人と楽しそうに授業に参加した学生もいた。学生が教室に現れると、不思議な身ぢからが湧いてきた。コロナ感染が頭を過つたりしたが。

二〇二二年二月九日水曜日二時限、わたしの最後の授業はやはり自宅ズームであった。授業の終わりを告げると、パソコン画面にずらりと並んでいた学生の名前がサーツと消えていった。残っていたのは学生とわたしの二人になった。静かな真面目な女子学生だった。「何か質問？」とわたしが聞くと、小さな声で「せんせい ありがとうございました」と言ってからスツと消えていった。パソコン画面にはわたしだけが大きくしになっていた。

パソコンの画面に残るは我ひとり
四十五年の教師のをはり

腕の見せどころ

どんな職業にも、腕の見せどころというものがある。

とあるレストランで、鴨肉を焼いてるところ見たことがある。鉄の櫛を途中で何度も刺し替えていたので、こう聞いてみた。「大将、なんで串を刺して抜き、刺しては抜きして、串の場所を変えるの?」と。すると、大将曰く、「鉄串は熱くなりますから、鉄串の入ったところは、火が通ります。しかも、血の付き方で、火の通り具合も、わかるんですよ。鴨肉はこれでない」と。

上野 誠

(会 員)

ハハアーン、そうであったのか、と感服したことがある。実際に食べてみると、柔らかく、火の通り方に妙なるものがあった、ソースが添えられていない意味が、私にもわかった。本来の肉の甘みを味わうために、ソースなど付けないのだ。

じつは、そういう専門知、職人技というものが、この世の中というものを支えているのだ。たぶん、われわれの生活というものは、服の仕立て、配管の技に至るまで、見えざる技によって支えられているのだ。

私は、万葉学徒の端くれとして、世を渡って

上野 誠 (うへの・まこと)



1960年福岡生まれ。国学院大学大学院文学研究科博士課程満期退学。國學院大學文学部教授(特別専

任)。奈良大学名誉教授。博士(文学)。第12回日本民俗学会研究奨励賞、第15回上代文学会賞、第7回角川財団学芸賞、第20回奈良新聞文化賞、第12回立命館白川静記念東洋文字文化賞受賞。第68回日本エッセイスト・クラブ賞。『古代日本の文芸空間』(雄山閣)、『魂の古代学——問いつづける折口信夫』(新潮選書)、『万葉挽歌のこころ——夢と死の古代学』(角川学芸出版)、『折口信夫的思考——越境する民俗学者——』(青土社)、『万葉文化論』(ミネルヴァ書房)など著書多数。万葉文化論の立場から、歴史学・民俗学・考古学などの研究を応用した『万葉集』の新しい読み方を提案。近年執筆したオペラの脚本も好評を博している。

きた。修行をはじめて、四十年となる。簡単にいえば、『万葉集』二十卷、四五一六首の解釈で飯を食っているわけだ。厳密に解釈するのは言うまでもないが、同じ歌の説明をするのでも、学生相手、研究者相手、一般公開講演会とみな違う。

今日は、巻一で一番説明の難しい歌について、説明してみたい、と思う。果たして、何をどう説明すれば、「ハハアーン、そうであったのか」と唸らせ、うまいもんだと言わせることができるのか。腕の見せどころだ。

巻一の六〇番の歌は、「長皇子の御歌」である。皇族なので、「歌」ではなく、「御歌」とある。原文は、

長皇子御歌

暮相而

朝面無美

隠尔加

気長妹之

廬利為里計武

となつている。奈良時代は、漢字の音と訓を用いて、こう記していたのだ。これを、漢字仮名

交じり文とすると、

長皇子の御歌

宵に逢ひて

朝面なみ

名張にか

日長き妹が

廬りせりけむ

となる。ここまでは、まあ、なんとかなる。しかし、ところがだ。前半の部分の説明が、じつに難しい。やってみると、こうなる。

現在、三重県に名張市というところがある。

この地名は、古代にもあって、同じ「ナバリ」だ。そして、この歌を解釈するためには、もう一つ、伝えておかなくてはならないことがある。それは、古代の言葉には、〈隠れる〉という意味の「ナバル」という動詞があったことだ。それを、連用形にすると「ナバリ」になる。さらに、もう一つ、伝えておかなくてはならないことがある。古代社会では、夜に男が女の家に訪ねてゆき、朝帰るといふ「妻訪い婚」というかたち

が、一般的であった。この婚姻のかたちだと、日中にまぎまぎと相手の顔を見ることはない。ことに激しい共寝をした朝は、互いに恥ずかしいものだ。だから、隠れたいと思うこともあった。そうして、男は、朝、女の家を出てゆく。すると、日中の時間は、隠れている時間として認識されることになる。なお、「激しい共寝」については、読者ご想像の通りであるからして、説明しない。

以上の内容を踏まえて、注釈を付けると、こうなる。

○宵に逢ひて 朝面なみ 名張にか 「ナバリ(名張)」という地名は、隠れるという意味の「ナバル」「ナバリ」を連想させる。妻訪い婚においては、夜の前半である宵に夫が訪れることになる。そうして早朝には出てゆくことになる。すると、日中には逢えないわけで、逢えない時間は姿を隠すということになる。これを序として、長い長い時間逢えなかった妹が、を起こしているのである。○日長き妹が 廬りせりけむ 「ケ」は、日数を示す言葉。したがって、「日長

く」といった場合には、日数が長く、ということになる。「廬」は、仮小屋のことだが、旅先では十分な宿泊施設を望めるわけでもなく、旅の廬といえば、草枕と同じように、安眠もできない状況をいう言葉である。仮寝をしていたのであろうか、とあるので、旅が終わった後に、その旅先での様子について、推量しているのである。

この注釈に基づいて、訳を付けると、このようなのである。

長皇子の御歌

宵に逢って共寝をし

朝顔と顔をよく見合わせることもなく

ナバリ(隠り)というのではないけれど そ

の名張にでも……

旅立って久しい妹は

仮寝をしていたのだろうか

「ハハアーン、そうであったのか」うまいもんだ」と読者を唸らせたら、万葉学徒、これに尽

きる喜びは無し。乞う、拍手、ご喝采である。はて？



尊厳ある買い物

三宮 麻由子

(会員)

こんがりと両面が焼きあがったイワシのたたきバーグ。笹搔きごぼうとおろし生姜を入れて片栗粉でまとめ、塩麴で調味してオリーブオイルで焼き上げる。キャベツとマツシユルームを加えて蒸し焼きに。雑穀ご飯、蜂蜜ヨーグルト、自家製糠付けダイコン、キウイ、イチゴ、生レモン水。

「いただきます」

短く食前の祈りを捧げて口に入れると、熱い空気で膨らんだイワシバーグの香ばしい香りとともに、生姜と塩麴の効いた懐かしい味が頬一杯に広がる。

そのとき、一つの思いが胸いっぱい溢れてきた。

「この食卓は、私が全て自分で作ったものなんだ！」

私は4歳で目の手術により「シーンレス」(私の造語で全盲の意味)となった。目の前からシーン(風景)が消えたが、訓練や経験によって私なりの「シーン」を取り戻した。しかし、自活となれば別である。

最大の問題の一つが、買い物だった。これは訓練では克服できず、どうしても人の目を借りなければならぬ。それが、買い物弱者にとつ

ていかに屈辱的で、苦勞の種であるかを、自立直後に思い知らされた。

もちろん、ヘルパーさんや友人、店員さんなど、人に助けていただく方法はある。だが、時折親切を受けるのと違い、日常の買い物で100%の人に頼らざるを得ないのは、想像以上に大

三宮麻由子（さんのみや・まゆこ）



エッセイスト。

『鳥が教えてくれた空』（NHK自
分史文学賞大賞）
でデビュー、『そつ
と耳を澄ませば』

で第49回日本エッセイスト・クラブ賞受賞。近著『四季を詠む』、『世界でただ一つの読書』（集英社文庫）。絵本『おいしいおと』、『でんしゃはうたう』、近刊『センス・オブ・何だあ？』、『どうぶつえんできこえてきたよ』（いずれも福音館書店）。『フランク・リスト 深音の伝道師』（仮、アルテスパブリッシング）。

変だった。

たとえば一週間分の野菜や肉、果物、魚などの食材や洗剤などの日用品をそろえると、合わせて20〜30点になる。これらを買うには、商品の一つずつ店舗で探してもらい、価格、賞味期限、調理法など必要な情報を読み上げてもらい、棚から取ってもらい、触って確認し、レジに誘導してもらって支払いし、梱包して持ち帰るといふ作業が要る。買うものを全部決めていても、この数を選ぶには相当の確認が必要だ。

さらに、一定の確率で必ず「ヒューマンエラー」が起きる。ある方は、ガイドヘルプの担当者で惣菜を取り間違え、食べたならアレルギーが入っていて大変な目に遭ったという。開封してしまったので返品はできないし、間違いだから苦情もいえない。その後の関係を考えて「泣き寝入り」したそう。私は、店員さんのミスで買ってもいない高額な商品を包まれ、後で事情を話して返品したことがある。見えていないと誰の過失かが証明できないため、取り違い問題は深刻なのだ。

あるコンビニに珍しく1人でランチを買いに

いき、店員さんに具材と調理法を読み上げていただいたところ、読み終わってから「普通、こんなので、読まないっすよね、ったくう」とひどい調子で言われた。

「読みますよ、アレルギーの人もいますから」

この日は思わず言い返したが、忙しい店員さんからすれば面倒なのだろう。多くは優しく対応してくださるが、こういう屈辱も日常茶飯事である。それでも、次回の利用を考えればたいていは「お手数おかけしてすみません」と謝るしかない。私はいつしか、買い物弱者にとって「尊厳ある買い物」は夢のまた夢なのだ諦めてしまった。

買い物リストを渡して買ってきてもらえば？という人がいる。だが、金銭のやりとりを伴ううえ、これだけのものを買う作業は、頼むほうにとっても頼まれるほうにとっても極めて煩雑になる。結局、私自身が行くのが最も効率的なのだ。

コロナ禍を機にネットスーパーの宅配利用を試みたが、いきなり壁に阻まれた。ログイン時に画像認識が必要なのだ。いつも行くスーパー

から、ほとんど全て把握している商品を配達してもらえるのに、画像一つでサイトにログインできなかった。本社に相談すると、店舗にきてくれればログインだけしてあげると本末転倒の助言を受けた。

そんなある日、シーンレスの方に「○○ならカタログをメールしてくれませう。アプリも画面読み上げで使えて便利ですよ」と教えていた。早速登録してみると、その日から全てが一変した。

まず、メールで受信したカタログを画面読み上げで聞き、ほしいものをコピーしてリストを作り、スマホにメール転送する。それをもとにスマホでアプリを操作して注文するのだが、このとき、みんなが書いてあるレビューや添加物など、商品の詳細を自力で見ても、買うかを決められるのだ。誰にも遠慮は要らず、全商品を好きなだけ見て「選ぶ」ことができる。自分以外のヒューマンエラーに見舞われることもない。そしてこの通販はシーンレスについて、野菜や卵の状態などの検品を配達員にお願いして良いという、素晴らしいサポートをしてくれる。

いまや、レシピを何カ月もかけて点訳していただかずともスマホで見られる。注文も1人でできるようになった。こうして全ての行程を自主性と尊厳を持ってこなした結果、あのイワシバーグの食卓を作り上げることができたのである。

宅配は便利、という次元ではなかった。尊厳ある買い物が実現したのだ。それにより、予想もしなかった精神的な自信と安心感が生まれた。これこそが「生きる」感覚なのだと、初めて思ったものである。



最近、感じていること

高木 徹

(会 員)

私が日本エッセイスト・クラブに入会させていただくきっかけになったのは2002年出版の「ドキュメント戦争広告代理店 情報操作とボスニア紛争」(講談社文庫)の出版であり、それが新潮ドキュメント賞や講談社ノンフィクション賞を受賞したことだ。国際紛争の帰趨を決めるようになった国際世論の誘導を目的とした「情報戦」を1990年代の旧ユーゴスラビア紛争の中でも激しい戦いとなったボスニア紛争を舞台に描いたものだ。

当時三十代だった私は、若さに任せてこのテーマに挑み、まずNHKディレクターとしての

番組制作、そしてそれをもとにした書籍執筆に全力投球した。

その結果が大きな評判となり、私も有頂天とは言わないが、思ってもみなかった評価に大きな自信を得て、次の作品に向かっていた気持ち五十代半ばとなった今もきのうのこのように思い出す。

その後もこの本は現在に至るまで毎年のように版を重ね、今春の講談社文庫のフェアにラインアップされ、それに備えてさらなる重版も計画されているという。そこには「国際情報戦」というテーマが今年になって大きな注目を集め

ていることもあるだろう。言うまでもなくウクライナへの軍事侵攻に関して、さまざまな情報戦が世界中を席巻している。その意味からも、この「戦争広告代理店」は発刊二十年を経て、さらなる意義をもった書籍になってきていると

高木 徹（たかぎ・とおる）



1965年東京生まれ。1990年NHKにディレクターとして入局。NHKスペシャル「民族浄化」ユーゴ・情報戦の内幕「バーミ

アン 大仏はなぜ破壊されたのか」情報聖戦「アルカイダ 謎のメディア戦略」など。企画・脚本・制作を担当した「ドラマ東京裁判」は国際エミール賞にノミネートされた。番組をもとに執筆した「ドキュメント 戦争広告代理店」で新潮ドキュメント賞と講談社ノンフィクション賞を、「大仏破壊 ビンラディン、9・11へのプレリウド」では大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した。現在NHK国際放送局チーフプロデューサー。

言えるだろう。

だが、自慢話のようなことはここまでだ。私は今、現在あらたに起きている事態について、情報戦の観点から深く取材するとか、分析するとかということがほとんどできないでいる。本来は「戦争広告代理店」の著者として、その知見を活かしてそうしたことをしても良い立場なのかもしれない。

今回の事態について、日本でも、さまざまなメディアやSNSで、いろいろな識者が連日のように発言を続けている。情報戦についても言及されている。だからすでに多くの人が注目し論じていることに今さら私が出る幕でもない、という気持ちもある。同時に、いま盛んに論じている識者たちの一部の人たちの論について、やや「軽さ」のようなものを感じていることも事実だ。

その中で、詳しく引用すると長くなるので、ここではあえてしないが、私自身は、3月末で東京大学を定年退職された国際政治学者の藤原 帰一先生（朝日新聞デジタルや、東京大学広報部によるインタビューなど）や、欧米では元C

IA長官で歴戦のアメリカ軍の將軍でもあった
デイビッド・ペトレイアス氏の語っていること
(NHK NEWS WEB 参照) に深くうなずいて
いる。

そして、自らがかつてしたボスニア紛争の情
報戦の作品について、確かに他の人があまり持
っていない視点から、深く広い取材でその構造
を明らかにしたことは事実だが、紛争が終わっ
た後に取材し、自分自身、遠く離れた世界から
やってきた者の視点から取材していたのだ、と
今になって感じている。当時は年齢的なエネルギー
ギッシュさも相まって一心不乱にやっていたの
で気づかなかつたのだが、たしかにそうなのだ。
そういうことだから、あの作品が制作できて、
書けたのだと思う。

さらに言えば、現在の事態については、私の
職場の仲間や、良く知る元後輩のフリーディレ
クターやフリージャーナリストなども現地に入
って取材している。すごい勇気だと思う。私は
そのタイプではない。そのようなことができる
取材者でも制作者でもなかつた。正反対だった、
ということもいまさらのように感じている。



終戦の年の夏

昭和二十年の夏になると、宮城県の片田舎の町、亘理にもアメリカ軍の戦闘機が姿を見せ始めた。この時から、子供たちは自由に遊べなくなり、何時も部落の仲間と一緒に遊ばなければならなかった。

未だ五歳だった僕は小学四年生の班长さんが迎えに来るのを待って遊びに出た。仲間は二列になって、「空襲警報怖くはないが、僕は小さいから、慌てないで騒がないで落ち着いて、入ってみましよう防空壕」と歌いながら遊び場に向かった。

その日は梅雨晴れの暑い日で、近くの用水堀

で水遊びをすることになった。避難場所は石橋の下で、遊びの前に班长さんの注意があった。

「小せいのは、水さ入っちゃだめだ。すぐ逃げられる橋の近くの土手で遊べ。空襲のサイレンが鳴ったら、走ってオレンとこさ来んだぞ」と言って、土手の上から橋の下に逃げる訓練をしたあと、皆はそれぞれの遊び場に散った。それからどれほど遊んだのだろうか。突然、北の方に飛行機の爆音があった。

「あつ、敵機だ。こっつだ、こっつさ来(こ)」

班长さんは大きく手を振り、上級生たちは裸でチビたちを助け回った。僕は土手を駆け落ち

今野 耕作

(会員)

るように石橋の下に逃げたが、飛行機の方が速かった。

「ダダダッ。ダダダッ、ダダダッ、ダダダッ、……」

石橋に着く前に土手の上が銃撃されてしまった。その音はものすごい。まるで爆弾が炸裂し続けたような音で、飛び散った小石や土が頭の上から降ってきた。

「うわっ！」

今野 耕作（こんの・こうさく）



1939年東京生まれ、京王電鉄取締役、埼玉大学特任教授、理事、社会保険庁職員審査委員などを歴任、現在、府中市生涯学習センター講師（万葉集・筆ペン）。京王電鉄のフリーペーパーに「沿線季節の散歩道」を十年連載。

上級生は橋の下で、チビたちを抱きかかえ、チビたちは上級生の腕にしがみついた。

続いてやって来た二機目は銃撃をせずに飛び去って行った。すると間もなくやつと空襲警報のサイレンが鳴り出した。

「なんだべ、今ごろ。でも、よすよす。みんな元気だからな」

班長さんはほっとした様子で空を見上げ回し、用心深く土手の上に登り戻ってきた。

「グラマンはもういいねえ。だども、まだ動くんじゃないぞ。空襲警報解除のサイレンが鳴ってから、帰っからな」

皆は橋の下にかたまり、解除のサイレンを待った。恐ろしく長く感じた時間が過ぎた。ようやく解除のサイレンが鳴り出すと僕も上級生も飛び上がって喜び、班長さんは大声で言った。

「さあ、帰えっぺ。並べ、並べ」

小さい子供たちの尻を叩きながら列を作ると、前と後ろに上級生の見張りがつき、空を見張りながら、部落へと急いだ。畑の道を通り過ぎ役場近くの通りに出ると、そこには子供たちの母親たちが待っていた。

「ケガはなかったの？」

母は、泥に汚れた僕を抱き上げ、体を確かめると、早足で家に帰り、「もう、遊びに行くんじゃないよ」と涙顔で僕を見つめるのだった。

この事件の後、子供の外遊びは禁止され、七月十日の夜になると、「仙台がやられてる」と町中が大騒ぎになった。

大人も子供も仙台の空を見晴らす農道に出て、赤く染まった夜空を眺めながら、

「焼夷弾だっぺかな」「丸焼けになっつまったんかなあ」「B 29は何機ぐらい来たんだべな……」などと、思い思いの言葉が飛び交った。

それから二、三日後、町は急に緊張感に包まれた。アメリカ軍が巨理に上陸して来るという噂で持ちつきりになったのだ。駅の引つ込み線には一台の機関車が留め置きされ、町に駐屯していた守備隊にも、伝令のサイドカーが姿を見せた。大人の話では、敵は阿武隈川の河口に上陸し、そこから田んぼの中を走る一本道を戦車で攻めて来るので、機関車はその道に横倒しにして侵略を防ぐというのだ。

その噂は一週間後に、現実味のある話になっ

た。

七月十七日、アメリカの第七艦隊が日立市を艦砲射撃で焼き払うと、すぐさま北上して来て巨理の沖合に姿を見せたのだ。海に面した隣町の荒浜からは敵の艦隊の様子が次々と入り、その夜、暗闇の中に何発かの照明弾が投下された。

真昼のように明るく照らし出された町は、戦場のような大騒ぎになった。噂では、日立では、照明弾の後に、艦砲射撃でやられたというのだ。馬車、牛車、リヤカーのある家はみな家財道具を車に積んで、峠を越えた山西村に避難を始め、車を持たない人たちはうろたえた。

僕の家では、暗闇の中、防空壕を掘り直し、そこに避難し朝を迎えた。すると誰ともなく艦隊が北に逃げて行ったという噂に変わり、町はまた、山西村から戻り始めた車でごった返した。ここで、僕の記憶はプツンと切れ、八月十五日の終戦の日に飛んでしまっている。

その日はカンカン照りの暑い日で、母は朝からやたらとそわそわしていた。昼近くになると我が家のラジオの前に近所の人たちが集まって来た。母は僕の手をきつく握り、ラジオの前に

立った。母の隣には、東京の空襲で焼け出されて来た叔父さん、叔母さん達が身なりをきちんとして立っていた。

十二時の時報が鳴ると、大人たちは頭を下げて静まり返り、天皇陛下のお言葉に聞き入り、やがてすすり泣きに変わった。すると母は突然、

「耕ちゃん、もう、もう……」

と声を出して泣き出した。興奮した母の声は聞き取れない。戸惑っている僕を抱きしめ、また泣き続け、ぼつりと言った。

「もう、空襲はなくなつたよ」

その日の僕の思い出はそれだけだった。



帝国ホテルの水

山本 一生

(会 員)

内田百間の評伝『百間、まだ死なざるや 内田百間伝』で、第七十三回読売文学賞を受賞した。五百六十頁を超える大作だが書き足らず、三月からは『これ、くん風到来 内田百間外伝』と題し、*WBC* 雑誌「ストイカ」に連載している。

読売文学賞の授賞式は、二月中旬に帝国ホテルで行われた。折からのパンデミックで招待客は制限され、広い会場ながらも、間隔をあけて配置された大きな丸テーブルには三名ずつ着席し、前には水の入ったグラスだけが置かれていた。壇上において、その荒涼たる光景を眺めながら、本クラブ賞を受賞したときのことが思い出

される。

五十を過ぎてから、恩師である伊藤隆先生を二十五年振りに訪ね、ご指導のもと『有馬頼寧日記』を読み始めた。日記に本格的に取り組んだのは、それが初めてであった。やがて有馬日記が完結すると、全五巻の人名索引の作成を依頼され、四千名近い人物を調べ上げる。まるで有馬頼寧の人生を探索するようで面白かった。それから先生の勧めもあって、日記に見え隠れする恋の話を書き上げる。生身の井深八重が出てくる自信作だったが、版元はなかなか見つからず、ようやく出版されても、川本三郎さんが

取り上げてくださったぐらいで、ほとんど評判にもならなかった。

そこで友人たちと、IT関係の仕事を立ち上げようかとも考え始める。石油会社のコンピュータ技術は時代の最先端で、すでに八〇年代後半には人工知能AIの導入の検討も行っていた。成功すれば長者となり、宇宙旅行に出かけていたかもしれない。振り返るとそのとき「日記読

山本 一生（やまもと・いっしょう）



©林 朋彦

1948年生まれ。

東大文学部国史学科卒業後、富士石油に入社、システム開発業務の傍ら競馬の歴史や文学に関するエッセイを発表、

その後近代史に転じる。『恋と伯爵と大正デモクラシー』で第56回日本エッセイスト・クラブ賞、『百問、まだ死なざるや』で第73回読売文学賞。その他『哀しすぎるぞ、ロッパ』『水を石油に変える人』『日記逍遙』『競馬学への招待』『書斎の競馬学』など著書訳書多数。

み」か「宇宙旅行」かの岐路にあったともいえるだろう。

本クラブ賞受賞の電話は、国会図書館にいたときに受けた。候補にあがっているのは知らされていたので、「やった!」という感じだった。すぐに先生に電話を入れると、「お前の本の良さが分かる人たちがいたか」と云って祝福してくださった。その晩は神楽坂の居酒屋「もく吉」に友人たちが集まり、朝まで飲み明かした。

読売文学賞については、事前連絡はまったくなかった。夕食をとりながら、NHK大河ドラマ『平清盛』を見ていた。ちょうど平治の乱が終わったところで、余韻に浸っていたときに電話は鳴った。「読売新聞ですが」と云われ、受話器を取った妻君は反射的に、「内は新聞はとっていませんので」と答えそうになったという。

まずは驚き、ついで喜んだが、本クラブ賞のときほどの高揚感はなかった。人生の岐路は過ぎ去っていたからだろう。先生からは以前に、苦言も呈されていた。

「本の価値は、受賞したから上がるわけではないし、受賞しなかったから下がるわけではない。

一喜一憂してはいけない」

ちやらちやらするな、ということであった。だからその後は、本が出てても、賞についてはとくに気にかけることはなかった。

とはいっても、読売文学賞である。ただちに何人かには電話を入れ、友人たちにはメールを出したあとは、バーボンを飲みながらNetflixのドラマを見て夜を過ごした。

本クラブ賞の授賞式では、歌人の尾崎左永子さんが書評をしてくださった。内容は覚えていないが、その立ち姿の美しさは、いまでも蘇る。有馬頼寧が日記に「女性は立ち姿」と書いているのは、このことかと思った。のちのパーティで父君が酒巻芳男宮内省秘書課長とうかがい、妙に納得した。

夜には再び「もゝ吉」に、今度は百人以上が集まって大騒ぎとなった。正賞でいただいたパーカーの万年筆を飾っておいたら、ボールペンにすり替えようとする不屈きな輩まで詰めかけていた。

その居酒屋もパンデミックによって、一昨年の秋には閉店に追い込まれる。かわって高校時

代からの親友が、帝国ホテルのあとの宴の場として、行きつけの銀座のワイン・レストランを予約してくれた。水だけだったので、ワインも料理も一段と美味しく感じられた。わずか七名の集まりだったが、かえって心にしみる祝宴となった。

話題は帝国ホテルの水から始まり、巡り巡っていつしか次回作に及んだ。日記物の長篇としては、有馬頼寧、古川ロッパ、そして内田百閒、次は吉野作造と告げる。

「宮武外骨も出てきて面白そうだ、期待してるぞ」

先生にそう云われて、ふとお年のことが気になり、こう申し上げた。

「エッセイスト・クラブ賞のときは、今年で後期高齢者になったと御挨拶されました」

「そうか、もうそんなになるのか」

「来年は、私も後期高齢者になります」

伊藤先生のお顔に、微笑みが浮かぶのがわかった。

人通りの少ない銀座通りを眺めながら、幸せな夜はそうやって更けていった。

日本近海の海底火山噴火の想い出

森本 貞子

(会 員)

一月十七日付の新聞は南太平洋のトンガ諸島で十五日の海底火山大噴火を伝え、十六日にかけて太平洋沿岸の広い地域で津波が観測され、南米チリでは一七四センチの津波、ペルーでは北部海岸の津波で二人の遺体が発見されたと伝え、日本でも四国・九州の港で船が被害を受けたと報じていた。

私の夫森本良平は生前東大地震研究所で地震、火山の研究者として活躍し、退官後の災害発生時にはマスコミより地震・火山の自然災害についての解説を依頼される多忙さで、私は夫の秘書役をこなしていた。それだけに今回のトンガ

の海底火山大噴火の報に、日本近海で発生した海底火山噴火二件を想い浮かべずにいられなかった。

一九五二年（昭和二十七年）伊豆諸島青ヶ島の南六〇キロメートルの明神礁が大噴火の際、調査船第五海洋丸が遭難し三十一名の乗組員が殉職している。森本は後続船で大噴火の連続写真を撮影し、海水変化の状況の調査研究など遭難原因を糾明する立場となった。さらに思い出すのは一九八九年（平成元年）伊豆伊東市沖での海底火山噴火観測の際と関わりある悲劇的事件が発生し、わすれられないのである。

なお森本は地上の活火山はほとんどが火口開口のおかげで各火山の特色を調査研究していれば大噴火を予告することはできる。実際に彼は雲仙岳の大噴火——一九九四年（平成六年）を予告している。しかし海底火山は海中に没して

森本 貞子（もりもと・ていこ）



1925年函館市に生まれる。43年東京府立第一高女卒業、同年森本良平（後年、東京大学名誉教授、地震研究所長）と結婚。92年

函館市旧イギリス領事館開港記念館展示パネル・ジオラマ監修担当、93年函館市文学館に函館ゆかりの作家として常設展示。2016年神山賞受賞、新聞、雑誌などへ随筆執筆、各地講演など活躍中。著書に『女海溝トネ・ミルンの青春』『冬の家 島崎藤村夫人冬子』（いずれも文藝春秋）、再刊行『女海溝トネ・ミルンの青春』（五稜郭タワー）『秋霖譜 森有礼とその妻』（東京書籍）ほか。

いるので調査できず予知はできない、と。

通常の火山噴火は火山灰雲が高く噴出し、ときに成層圏まで達するほど。さらに火山によって火口より直接火砕流を噴出し数百度に達する火山ガスと共に大小の岩石塊を噴出し、その速度は新幹線なみ。スカートを広げたように直接地上を襲い、障害物の高低をもとわず乗り越えるすさまじさである。雲仙岳では四十四名が犠牲者となってしまった。このような火砕流が海底火山で発する火山火口から直接の噴火圧力で海水が圧されて津波になる。明神礁の第五海洋丸沈没もこの海水圧力だったのでは、とは森本の研究結果であった。私はトングの津波の発生は海底火山の火口火砕流の圧力ではないかと推察している。

一九八九年（平成元年）十月十三日伊豆伊東市沖で海底火山噴火との報せにA新聞社より森本に調査観測の依頼、ヘリコプターで熱海市海岸公園を発着場所としての観察であった。一日中の観測を終え帰宅した夫は海底火山噴火としては大規模ではなく伊豆地方に小地震はあったらしいが津波の心配はない、と語って、伊豆は

温泉地だから一安心だと。翌日もへり観測で「かなり疲れた」と訴える森本。さらにその翌日、日テレビよりの依頼である。夫は火山噴火観測

には大リュックにカメラ、望遠鏡、ペットボトル水などなどと常備薬も背負わねばならず、あまり丈夫でない夫を気遣う私はその日の観測行きは車で、しかも伊東市からの観光棧橋からの観測が最適だということ、と知った私は日テレビの女性プロデューサーに荷物運びの秘書役として同行を、と願い出た。伊東市観光棧橋の手前で降車し棧橋へ。なんと棧橋の幅三メートルほど、長さ約十メートル程で「なまこ餅」のような形。左右も先端も丸くなって海に落ちていく。しかも先端は海水がひたしているのだ。森本は棧橋先端よりかなり手前で歩を止め、私は夫に添って立った。後続のカメラマンは三脚を立てて撮影準備、彼は夫に「先生もつと先端に行つて下さい」と。私は驚いて制した。「棧橋の先端も洩も丸くなっているのよ。観測に夢中になると足許が危ない、落ちるわ、これより先は無理よ!」と。カメラマンはしぶい表情。その日、かなりの長時間観測であったが、海底火山

噴火はドーム型で小さく大噴火ではなかった。けれど森本は疲れていたので一泊し、私達夫妻は電車で帰った。

それから数年後のことである。ふとテレビのニュースを見ていた私はびっくり。「妖艶で有名な女優太地喜和子さん、伊東市観光棧橋から転落、帰らぬ人に。四十八歳だった」と。私は冷水を浴びせられたようにぞっとする。続けてアウンサーは「十月十三日午前二時すぎの事で前日十二日夜、伊東市観光会館で催された文学座公演『唐人お吉ものがたり』に出演、舞台を降りた喜和子さんは伊東の街で食事をし、スナックに立寄り、そのママの運転する車で『海を見たい』との彼女の望みで観光棧橋へ。ところが棧橋の先端まで行き、あつという間に海に落ちてしまった」と。私はあの棧橋は昼間でも危ない、夜の闇では分らなかつたに違いない、とその悲劇に背筋が寒くなった。のち発刊の週刊誌ではスナックママと同行の男優二人は助けられたが喜和子さんだけ海に消えたとなつた。不運である。夫と私はこの悲劇について語りあつたとき森本は「運が悪かつたのだ」とひとこと。

それには理由がある。

じつは、明神礁大噴火のさい、森本は調査船第五海洋丸に乗船予定であった。晴海埠頭発の時刻に遅れてしまい後続船での調査乗船となった。ところが第五海洋丸は大噴火で沈没、乗員全員殉職の悲運。森本は幸運といえない立場である。私は複雑な心境が消えない。それだけに伊東市沖火山噴火の際にまつわる悲劇も人知ではどうにもならない「運」を巡って考えずにはいられなかった。あの栈橋はどうなったのだろう。気になってならない私は悲劇から数年後、伊東市に。駅前からタクシーで観光栈橋へ。運転手は「あの栈橋について伊東市の人はふれるのはタブーなのですよ。なぜ行くのですか？」と。私は答えることができない。不運の栈橋はするどい角のある長方形の堅固な栈橋になっていた。



エッセーを募ります

会報「冬号」(電子版)に掲載

今年も会員の皆さまのエッセーを募ります。クラブ創設60周年記念で募集して以来、12年連続12回目の企画です。応募作品は、会報「冬号」(電子版)に掲載されます。締め切りは9月末です。奮ってご応募ください。

冬号が電子版に模様替えて、4年目になります。会報を広く社会に発信することで、クラブの認知度、存在感を高め、若い世代にもアピールするのが狙いです。会報発行にかかわる経費の節減にもなります。応募エッセーのテーマは自由。要領は下記の通りです。できるだけ多くの会員の作品を紹介したいと存じます。とりわけ近年、クラブに入会された方々には、自己紹介、近況報

告の意味合いも兼ねて、ぜひご応募ください。ようお勧めいたします。一方で、多くの会員の参加を歓迎する趣旨から、2年(2回)連続の応募は遠慮いただいております。一昨年(前々回)応募された方にはなんの制約もありません。

応募要領

- ・ 本文は1600字。
 - ・ 200字以内の略歴を添付してください。
 - ・ できるだけメール添付でお願いします。
 - ・ 応募原稿は原則としてご返却いたしません。
- ※詳しくはクラブ事務局まで。

(理事会)

クラブのホームページで
会報「2021冬」号を
お読みいただけます

スマホ、あるいはパソコンの検索欄(Google、Yahoo!など)に「日本エッセイスト・クラブ」と打ち込み、検索の項目から「日本エッセイスト・クラブ: home」をクリックするとホームページに誘導されます。ホームページの「クラブ会報」をクリックし、各号の青色の「PDFダウンロード」を再度クリックすると、会報の内容をお読みいただけます。

ご寄贈と自著紹介のお願い

刊行から概ね1年以内を目安に、ご著書の紹介を事務局あてに随時、郵送、FAX、メール等でご送稿ください。紹介の本文は著者名、著書名は別にして、250字程度。また本文とは別に出版社・価格を付記願います。なお、ご寄贈いただいた著書は、表紙を事務局でスキャンして紹介文とともに掲載いたします。



♡クラブ賞候補作推薦ハガキより♡

「ステイ・ホーム」を守っている訳ではありませんが、今の処、COVID・19攻撃を何とかかわしてきました。もうすぐ3度目のワクチン、これが最後だといいいのですが…。

(中村 龍介)

コロナだけではなく、世界の政治状況も危い話ばかりです。違いは前者が自然界の不可解な現象であるのに対して、後者は人為的に作られているという違いがあります。メディアはその違いを冷静に分析して伝えるべきなのに、煽情者になっているのを嘆いています。(小林 和男) 人工透析のお蔭で元気を回復、ぶじ91歳の誕生日を迎えました。(渡辺 綱纜)

谷村鯛夢の企画プロデュースで、1月5日に湯川れいこ著「時代のカナリア」(集英社)刊、1月26日に編者として九鬼周造・大川裕弘著「いきの構造」(バイインターナショナル)刊。著者として3月に「俳句ちよつ」といい話」(紅書房)を刊行予定。

(谷村 鯛夢)



句会が楽しみ。

咲く花に鳥の声聞く老の日々

短編小説『夜桜』を執筆。

(砂原 和雄)

コロナ禍ですが、何とか生きのびています。地方紙にエッセイを連載したり、俳句を作ったりして、すごしております。(杉山 武子)

こんなにやく座によるオペラ『あん』を堪能しました。呻吟しながら文字を書き連ねていた時は、こんな未来があるとは思っていませんでした。

(ドリアン助川)

放送人として送った私の半生を「私の放送人生」と題して、日本民放クラブの会報に掲載したあと、どつと疲れが出てしまいました。昨年11月に心臓を手術し、ペースメーカーを入れたら、今度はこの正月に肺炎で20日間入院。幸いコロナではありませんが、春の到来を心待ちにしています。(武本 宏一)

昨年5月、歳80・傘寿を記念に自費出版にて一文をまとめました。題して『わが回想』。ご希望の方に差し上げます。クラブ事務局にもありません。(大高 英昭)

いわゆる老人ホーム入りして最後の時ですが、これまた長くなって来ました。まさに予定のたたない日々です。東京はお天気もよく、ほんとうならたのしい日々のはずなのに。

(東畑 朝子)

身老心開。それでも本は読みます。「岸恵子自伝」も「百問、まだ死なざるや」(山本一生)も「聖子」(森まゆみ)も「人間臨終図鑑」(五冊、関川夏央)も読みました。良書次々に出ます。無条件で求めるのは野見山曉治、安野光雅(亡くなられて残念)、森まゆみなど。あとは本屋で場あたりです。

(菊澤 研一)

昨年夏休みの宿題に一年生の孫が初めての作文を書きました。何の外連味もない素直な文章に涙しました。世界一小さな一人出版社「こぶな書店」から絵本を出版することになりました。「とこのはたけとうたれちやったしか」です。著者は、大津波直後に生まれた風(なぎ)です。一日も早く海が風ぎる用にと名付けられました。

(畠山 重篤)

コロナ禍のなか、声楽家・本岩孝之氏のコンサートに行きました。彼のカウンターテナーが聴きたくて…。私の前著『画執の人』(六耀社)はアイコン画家山下りんを追ったのですが、終始本岩氏の「カッチーニのア

ヴェ・マリア」を降り注ぐ光にして書きました。現在私は大正時代の若き作家たちを辿る日々。今回は本岩氏も参加の「竹下夢二と大正ロマン」CDをリフレインさせながら書き進めています。その美しい響きに誘われ、かつてあなた方がいたことを語らせて欲しい」と祈りつつ…。

(海老沢小百合)



厚木市立中央図書館が2025年度に移転する。合同庁舎に入るためワンフロアしか使えなくなり、県内でも蔵書の多い同図書館は今、「自由に持ち帰り下さい」コーナーで蔵書の一部を手放している。寂しいことだ。

(栗生 將信)

夢で白衣姿の厄病神が現れ、手招きし、「ワシについて来い」と言われました。イヤだと答え、あと5年生きる許しを頂きました。幼い頃高熱にうなされて死にかけたことがありました。そのときも夢に厄病神が現れ、手招きをされました。拒否したおかげか今日まで生きています。

(中村 政雄)

コロナ禍のなか、三月から、月一回、海外の旅についての連載が始まりました。原稿依頼をうけた時つけてくれたタイトルは「旅の記憶」。編集者が現状をよく理解してくれているようで、ありがたいことです。

(秋山 秀一)

一月十九日、六十年連れ添った妻が亡くなりました。享年九十歳。医師の診断では老衰死でしたが、死ぬ直前まで元気で、死ぬときはまるで眠りに入るような安らかな死でした。

(山本思外里)

今季ほど雪の多い冬は、ずいぶん久方ぶりです。それに耐えて過ごすのもつらいものですが、昔の冬をな

つかしく思い出しました。70年近く前、子どものころのわが家は茅葺きでした。軒下にたくさんのツララを下げ、田んぼのなかに雪に埋もれるように建っていました。暖房はこたつだけで風呂もトイレも外。人間は、つらく悲しい思いは忘れっぽくできている生きものなのです。

(野中 康行)

昨年夏に、47都道府県すべてに背中をつけてきました。つまり各地で一泊以上を完了。日本百名山登頂はもう無理なので、百湖沼訪問でも目標に……とも考えましたが、インパクトが無いで、ひらめきました。私は76歳なので「お正月を百回迎える」を目標にします。アト24年生きる……達成出来そうな気がします。

(菅野 光公)

東京都の水道の貯水池である村山・山口両貯水池を訪ねました。昭和の初期に完成した貯水池ですが、東日本大震災を契機に水を貯める土手の補強工事が完成していました。安心です。

(坂本 弘道)

石垣島を離郷して七十年。東京をはじめ、米国(コロラド州)、アフリカ(リビア国)、サウジアラビアで暮らしました。現在、豊見城市(沖縄県)に住んでいます。一八五一年二月、中浜万次郎氏が米国より十五年振りに帰国、帰郷までの半年、滞在したところです。そのご縁で「ジョン万次郎物語」を執筆、出版させて頂きました。

(長田 亮一)

私は介護施設での生活を送っています。毎日の行事をそれなりに楽しんでいきます。時に笑い合う仲間ができたこと、笑いは「長生きの薬」だなどと言いながら。入浴は一週二回だけです。障害者介護事業の初期を知る私には驚きです。進歩したものです。昔は起重機のような巨大な機械を使って利用者を吊り上げ、そしてお湯にジャブんと降ろしたものです。今では専用の手軽な機械で、簡単にお湯につかることができます。転倒することもありません。長年二男の世話を見て苦労した妻も最近亡くなりました。天で二男と再会、喜

び合っていることと思うのです。いずれ私の番になってみんな喜びを共にしたいものです。(吉原 賢二)
約20年間通った山中湖での仕事を終了、全くフリーになりましたが、時間をもて余し、一献傾ける知己はなく、月に2〜3回は昔の仲間を求めて富士山麓へ逆戻りするこの頃です。

(川田 志明)

会員近況投稿のお願い

会員近況欄への投稿を歓迎いたします。字数は80字程度。エッセーおよび近況欄へのご感想なども事務局までお寄せください。お待ちしております。

事務局から

新会員の紹介

竹本 祐子(たけもと・ゆうこ)氏



松本市監査委員。ミステリ小説の翻訳と発刊を経て、生家の酒造会社社長。

酒造業のかたわら地方紙にコラムを掲載。著書に『酒造と猫』『桜の花の散る頃に』など。長野県在住。

新会員推薦のお願い

会員一名の推薦でも審査

当クラブの新会員をご推薦ください。クラブの一層の活性化をはかるべく、ぜひ新しい仲間たちを迎えたいと存じます。お知り合いなどで、会員にふさわしい方をご紹介ください。

るよう、皆さまのご協力をお願いします。

クラブ定款第7条にありますように、正会員となるには、現在の正会員2名以上の推薦を得て、理事会の承認を求めることになっています。

この「2名以上の推薦」という原則は変わりませんが、会員1名の推薦でも、理事会に申請していただければ、審査の対象とします。理事会推薦によって、規約の要件は十分に満たすことができます。

エッセイストの意味合いについては、狭義の随筆や随想だけにとらわれず、評論、ノンフィクションなど幅広い分野を対象にしています。著書や新聞・雑誌などのお仕事を参考に、クラブの趣旨に即して、理事会で審査します。

4月現在の正会員は198名です。入会推薦の用紙などはクラブ事務局に用意していますが、新型コロナ禍の影響で在宅勤務などもありますので、なるべく郵便かメールでご連絡ください。

なお、毎年のクラブ賞審査で、原則として正会員の作品は対象外ですが、入会の翌年から5年以内に発表した作品は対象になりますので、申し添えます。(理事会)

会員からの寄贈著書

濱邊祐一氏著『救命センターカンフ

アレンス・ノート』

渡辺綱繼氏著『エッセイ集 フェニッ

クスの木蔭』

中山士朗氏著『中山士朗エッセー集青

き淵から』

菅野光公氏著『改訂版 核兵器ではな

く花をください』

※みやざきエッセイスト・クラブから『珈琲の香り』作品集26のご寄

贈がありました。

(11月から3月下旬まで)

健康保険のご案内(2022年度)

当クラブは「文芸美術国民健康保険組合」に加盟しています。加入資

格は「当クラブ会員で、文芸、美術および著作活動に従事している方とその家族」です。保険料は組合員の収入の多寡にかかわらず均等です。本年度の保険料は現行どおり据置きとなりました。

・医療保険・後期高齢者支援金分
本人 月額 2万1100円
(内訳・医療保険分1万6400円、後期高齢者支援金分4700円)

家族(1人) 1万1600円

(内訳・医療保険分6900円、後期高齢者支援金分4700円)

・介護保険料(満40〜64歳まで)
本人・家族共(1人) 5200円
医療費の自己負担は本人・家族共3割、70歳以上の方は2割から3割です。なお、75歳以上の後期高齢者の方は加入できません。

詳細は文芸美術国民健康保険組合(03-5807-3551)へ。

第70回日本エッセイスト・クラブ賞の審査は3月中旬から始まりました。同クラブ賞は、1952年(昭和27年)に創設されて以

来、今年で70回目を迎えます。クラブ会員および出版社から推薦された作品を対象に、3月から5月末まで5回の審査をすすめます。

第70回クラブ賞

6月1日に受賞作発表

受賞が決まる最終審査委員会は5月31日(火)を予定、翌1日(水)の各新聞朝刊で発表いたします。

なお、クラブ賞贈呈式は6月27日

(月)、日本記者クラブ会見場で、午後3時からの総会に引き続き、3時半から開催される予定です。

特別維持会費ご寄付のお礼

3月末までに、次の会員からご寄付をいただきました。ご芳志のほど、心からお礼申し上げます。

(順不同・敬称略)

斎藤 勇 井口 隆史
桃井 恒和 倉部 行雄
高階 經和 松田 宣子
久谷與四郎 大岩 孝平
柳田由紀子 齋藤健次郎

2021年度理事会報告

第2回理事会(22年3月30日)

- ・ 会員の現況報告
- ・ 2022年度予算案について
- ・ 新入会員の承認
- ・ クラブ賞審査委員会について
- ・ 新常務理事の選任について
- ・ 原田國男常務理事が退任して理事に。新たに高村壽一、中丸美繪両氏を常務理事に選任し

一般社団法人日本エッセイスト・クラブ定款

(抜粋)

第1章 総 則

(名称)

第1条 この法人は、一般社団法人日本エッセイスト・クラブと称する。

(目的)

第3条 当法人は、エッセイストの親睦をはかり、共通の利益を擁護し、言論の自由を主張し、文化と平和に貢献することを目的とし、国際文化団体との連携を期する。

(事業)

第4条 当法人は前条の目的を達するために下記の事業を行う。

1. 会員の相互協力
2. 国際文化交流
3. 研究調査の発表並びに講演、見学
4. 会員相互の親睦と相互扶助
5. クラブ賞の選定、その他必要な一切の事業

第2章 会 員

(種別)

第6条 当法人の会員は、次の5種とし、正会員をもって一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下「一般法人法」

という。）上の社員とする。

- (1) 正会員 当法人の目的に賛同して入会した個人
- (2) 法人会員 当法人の目的に賛同して入会した法人
- (3) 賛助会員 当法人の事業を賛助するため入会した個人又は団体
- (4) 名誉会員 当法人に特に功労があり、理事会で推薦され、会員総会で承認された者
- (5) 特別会員 当法人の正会員として20年以上継続した者又は当法人が主催するクラブ賞を受賞した者が満85歳になったとき

(入会)

第7条 正会員として入会しようとする者は、正会員2名以上の推薦を得、申込書に会費を添えて理事会の承認を受けなければならない。法人会員、賛助会員は理事会が推薦する。

第3章 会員総会

(構成)

第13条 会員総会は、すべての正会員をもって構成する。

2 前項の会員総会をもって一般法人法上の社員総会とする。
(会員総会)

第14条 当法人の会員総会は、定時会員総会及び臨時会員総会とし、

定時会員総会は、毎事業年度の終了後3か月以内に開催し、臨時会員総会は必要に応じて開催する。全会員の5分の1以上が書面により請求したとき、または理事会が会議の目的事項を示して請求したときは、会長は臨時総会を招集し

なければならぬ。

第4章 役員等

(員数)

第20条

当法人に次の役員を置く。

(1) 理事 15名以上25名以内

(2) 監事 2名以上

2 理事のうち、会長1名、理事長1名、専務理事1名、常務理事若干名、事務局長1名を推薦して理事会の決議によつて、理事の中から定める。

3 会長及び理事長は、当法人を代表し、一般法人法上の代表理事とする。

第5章 理事会

(権限)

第28条

理事会は、次の職務を行う。

(1) 当法人の業務執行の決定

(2) 理事の職務の執行の監督

(3) 会長、理事長、専務理事及び常務理事の選定及び解職

第6章 計 算 (略)

第7章 清 算 (略)

第8章 附 則 (略)

役員名簿

会 長	遠藤利男			
理 事 長	(空 席)			
専務理事	秋岡伸彦			
常務理事	栗田 亘	高村壽一		中丸美繪
	堀尾真紀子	よしだみどり		
理 事	秋山秀一	梅津時比古		原田國男
	深尾凱子	藤原作弥		藤原房子
	降幡賢一	松田宣子		森脇逸男
監 事	大高英昭	今野耕作		
事務局長(兼)	降幡賢一			
名譽会長	村尾清一			

* * *

会 員 名

(2022年4月1日現在 263名)

五十音順

あ行

阿川佐和子	阿部菜穂子	青木 賢児	秋尾沙戸子	秋岡 伸彦
秋田 博	秋山 秀一	芥川 喜好	浅川 港	甘里 君香
足立 則夫	有馬真喜子	五十嵐佳子	井口 隆史	池内 紀昭
池谷 薫	伊野啓三郎	飯塚 恆雄	飯塚 浩彦	市川 桃子
市田 隆文	猪熊 建夫	岩瀬 達哉	上田 篤	上野 創
上野 誠	白井 和恵	鶴飼 哲夫	内池 正名	内田 洋子
梅津時比古	浦田 憲治	海老沢小百合	榎本 好宏	遠藤 利男
小川津根子	小倉 董子	小澤 秀雄	小塩 節	小曾戸明子
尾崎左永子	尾崎 俊介	及川 直志	大井 玄	大塚 義治
大岩 孝平	大城 浩詩	大平 常元	大高 英昭	大谷 克弥
大場 司	大村 智	大宅 映子	太田 愛人	岡 佳津子
岡田恵美子	岡田 直敏	奥山 俊宏		

か行

加固 康二	加藤 恭子	加藤 貞仁	勝方 信一	金森 敦子
金子 光美	亀田 泰武	軽部 謙介	河合 弘之	川田 志明
川良 浩和	菅野 光公	城山 邦紀	儀同 保	菊澤 研一
岸 恵子	岸本 康	北野 栄三	北村 行孝	久我なつみ
久谷與四郎	轡田 隆史	倉部 行雄	栗生 将信	栗田 亘
黒川 鍾信	小池 光	小池 英夫	小泉 清	小谷瑞穂子
小林 和男	小松 浩	児島 宏子	後藤 秀機	今野 耕作
紺野 猷邦				

さ行

さだまさし	佐々木健一	佐々木 卓	佐々木満里子	佐田 智子
佐藤 きむ	佐藤 幸子	佐橋 慶女	佐保田芳訓	斎藤 勇
齋藤 健	齋藤健次郎	齋藤 博康	柴門 ふみ	坂口 和子
坂本 政謙	坂本 弘道	澤口たまみ	澤地 久枝	澤藤範次郎
三宮麻由子	志村ふくみ	塩谷 靖子	下重 暁子	下村 満子
杉江 弘	杉溪 一言	杉戸 大作	杉山 武子	鈴木 章一
鈴木 博	砂原 和雄			

た行

田中 トモミ	田中 伸尚	田中 秀一	田中 實	田沼 敦子
田谷 麗子	田和 潤子	高井 潔司	高木 徹	高階 經和
高島 肇久	高村 壽一	竹内 一正	竹中 淑子	竹本 祐子
武本 宏一	谷地 快一	谷村 鯛夢	俵 万智	柘野 健次
辻 由美	堤 未果	鶴ヶ谷真一	D・ゾペティ	出久根達郎
ドリアン助川	戸田 桂太	戸田 淳子	鳥羽欽一郎	東畑 朝子
当銘 貞夫	徳田 正幸	富永 孝子	富山 和子	鳥海 修

な行

内藤 啓子	中島さおり	中野 利子	中名生正昭	中丸 美繪
中村 史郎	中村登紀夫	中村 政雄	中村 龍介	中山 士朗
永井 梓	長井 好弘	長田 亮一	長友佐波子	長野 安恒
長屋 龍人	並木きょう子	二宮 正之	蜷川 真夫	縫田 曄子
野中 康行	野見山曉治			

は行

葉山美知子	羽中田 昌	畑 正憲	畠山 重篤	濱邊 祐一
原 彬久	原田 國男	林 望	樋口 恵子	廣野 眞一
深尾 凱子	福田 章	福田はるか	福原 義春	藤原 勇彦
藤原 作弥	藤原 房子	藤原 正彦	船木 拓生	降幡 賢一
古川 洽次	古川 浩	穂苺 正臣	細川 俊夫	堀尾眞紀子

ま行

前田 晃伸	牧 久	牧村健一郎	正籬 聡	又吉 國雄
町田 邦雄	松田 宣子	松本 仁一	萬年 浩雄	三島 利徳
水谷 亨	道脇 弘俊	南 砂	宮本 倫好	村尾 清一
村松 賢一	望月 照彦	桃井 恒和	森 小夜子	森 孝之
森 武生	森 哲志	森本 貞子	森本 雍子	森脇 逸男

や行

八百板洋子	八木 美雄	安嶋 明	柳生 尚志	柳澤嘉一郎
柳澤 桂子	柳川 時夫	柳田由紀子	山川 静夫	山形 孝夫
山岸 健	山口 寿一	山口 仲美	山下 健	山藤 章二
山室 寛之	山本 一生	山本思外里	よしだみどり	養老 孟司
横山 昭作	吉岡 純子	吉野源太郎	吉原 賢二	吉行 和子

わ行

若林

滋

脇

祐三

渡辺 綱纜

渡辺美佐子

渡邊 満子

法人会員（順不同）

朝日新聞社	岩波書店
毎日新聞社	講談社
読売新聞社	集英社
産業経済新聞社	
日本経済新聞社	
中日新聞社	
共同通信社	
日本放送協会	
TBS テレビ	

日本エッセイスト・クラブ事務局



日本エッセイスト・クラブ

会報 2022 春 (No.73-III)

2022年4月25日 発行

発行人 遠藤利男

発行所 一般社団法人 日本エッセイスト・クラブ

東京都港区新橋1-18-2

明宏ビル別館6階 〒105-0004

電話 03(3502)7287

FAX 03(3502)7288

ホームページ <http://essayistclub.jp/>

Eメール info@essayistclub.jp

印刷所 (株)TBSシロワメディア

古今東西の名著、その核心を読み解く——。大好評の愛蔵版！

NHK「100分de名著」ブックス

定価 各1,100円(税込) ★は定価 1,430円(税込) *各四六判 並製

ドラッカー マネジメント	上田惇生
孔子 論語	佐久協
ニーチェ ツアアトウストラ	西研
福沢諭吉 学問のすゝめ	齋藤孝
アラン 幸福論	合田正人
宮沢賢治 銀河鉄道の夜	ロジャー・バルバス
ブツダ 真理のことは	佐々木閑
マキャベリ 君主論	武田好
兼好法師 徒然草	荻野文子
新渡戸稲造 武士道	山本博文
パスカル パンセ	鹿島茂
鴨長明 方丈記	小林一彦
フランクル 夜と霧	諸富祥彦
サン・テグジュペリ 星の王子さま	水本弘文
般若心経	佐々木閑
アインシュタイン 相対性理論	佐藤勝彦
夏目漱石 こころ	姜尚中
古事記	三浦佑之
松尾芭蕉 おくのほそ道	長谷川 權
世阿弥 風姿花伝	土屋恵一郎
万葉集	佐佐木幸綱
清少納言 枕草子	山口仲美

紫式部 源氏物語	三田村雅子
柳田国男 遠野物語	石井正己
ブツダ 最期のことは	佐々木閑
荘子	玄侑宗久
岡倉天心 茶の本	大久保喬樹
小泉八雲 日本の面影	池田雅之
良寛詩歌集	中野東禪
ルソー エミール	西研
内村鑑三 代表的日本人	若松英輔
アドラー 人生の意味の心理学	岸見一郎
道元 正法眼蔵	ひろさちや
石牟礼道子 苦海浄土	若松英輔
歎異抄	釈 徹宗
ユゴー ノートルダム・ド・パリ	鹿島茂★
サルトル 実存主義とは何か	海老坂 武
カント 永遠平和のために	菅野稔人
ダーウイン 種の起源	長谷川眞理子
アルベール・カミュ ペスト	中条省平
バートランド・ラッセル 幸福論	小川仁志
三木清 人生論ノート	岸見一郎
法華経	植木雅俊
宮本武蔵 五輪書	魚住孝至

re
CLUB